

ウルムチ, トルファン, 敦煌 風の旅



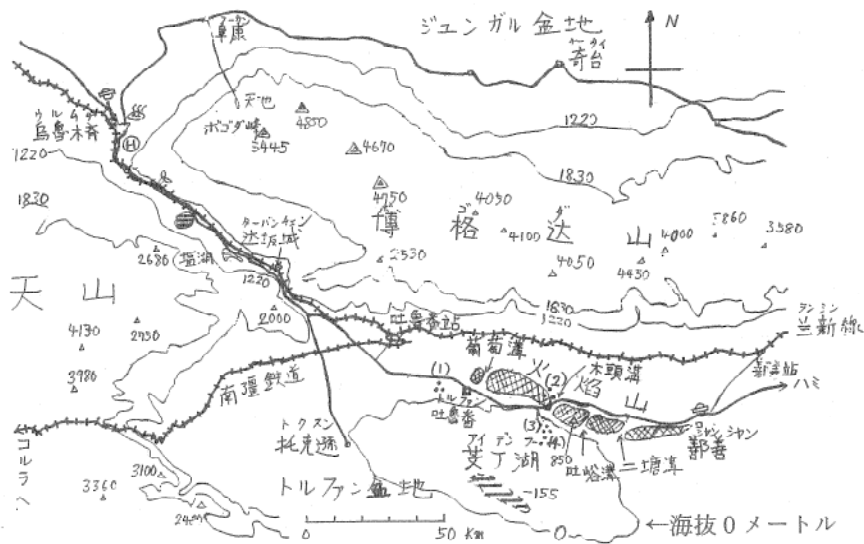
随筆

塙 輝 雄*

まえがき

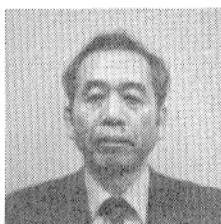
かねて敦煌莫高窟を初めとして天山東部に散在する石窟を観るシルクロードの旅をしたいと思っていた。しかし現地の具体的な旅行情報は極度に少く、中国における一人旅の困難さを考えて仲々実行に移せなかった。そこで昨年9月上旬、旅行会社企画の“北京, ウルムチ, トル

ファン, 敦煌, 上海8日間”という欲張ったツアーに参加して能率的に現地を見てくることにした。行って見ると確かに看板通りの場所を歴訪したが、現地で見物出来たのはトルファン半日, 敦煌1日半, 計2日であった。私共のツアーは中国の風蔵と呼ばれる地を風のように走り抜けた“風の旅”であったが再訪を計る上では貴重な経験となった。



- | | |
|-------------------|---------------------------|
| +++++ 鉄道 | ☺ 温泉 |
| ==== 幹線道路 | ⚡ 風車発電所 |
| —— 等高線(ftをmに換算した) | Ⓜ 友誼賓館 |
| △ 峰(4500m以上) | ⋯ 遺跡 (1) 交河故城 (3) アスターナ古墳 |
| ⊕ 飛行場 | ⋯ (2) ベゼクリク千仏洞 (4) 高昌故城 |
| ⊙ 湖 | |

付図 ウムムチ, トルファン附近地図



*Teruo HANAWA
 1926年2月23日生
 1948年大阪大学理学部化学科卒業
 現在、大阪工業大学一般教育科、教授、理学、表面物理、(大阪大学名誉教授)

ウルムチからトルファンへ

2日間、北京で足踏みさせられた一行は、夜10時半に出発、4時間の飛行の後ウルムチに到着、空港から最も遠いホテル、友誼賓館に入った時は午前3時45分であった。一風呂浴びて

寝たのが4時半、8時に起され、9時朝食、9時半出発という強行軍となった。ここで、先ず、時刻について断っておかねばならない。中国では全国一律に北京時間で統一しているが、ウルムチ附近では北京と2時間の時差が存在するため、“実時刻”は北京時刻から2時間引いたものになる。また緯度は我が国の北海道中央部に相当する。

我々一行は、男性が60才以上7名、20才台1名、女性は添乗員を除き14名、大部分熟年であったが、全員元気でトルファンまで4時間のバス旅行に出発した。

大阪出発前に、この地域の詳細な地図を探したが見付けることが出来ず、ホテルの売店にも無かった。折角始めての土地に來ながら地図なしでは何処を走っているのかは勿論、見たものが何かも判らずトルファンまで来てしまったのである。幸い、最近この地域の百分の一の地図(1980年版)を見ることが出来たので、これを下敷にして案内図を描くことが出来た(付図)。図では複雑さを避けるため、川や非幹線道路を省略した。又海拔-155mの艾丁湖^{アイディン}の位置や大きさは推定(夏期は水が無い)、火焰山の輪郭は正確な等高線ではない。

ホテルを出て、樹林を下り、最初に目に付いたのは、イスラム風の小建物が乗っている大きな砂礫の丘と、その先に聳える大きな化学装置らしい構造物であった。丘は自然のものではなく、ボタ山のように見えたので、ここは選鉱場か、精練所であろうと想像する。しかしこの索漠とした工場の彼方には、山々が朝日を受けて束の間のバラ色に輝き、私共を歓迎しているようであった。

ウルムチ南效には多数の中層集合住宅と若干の工場が点在し、道路沿いには低く貧弱な小家屋、果物を売る露店、小さな食堂等が続き、出勤する人々が歩き、奥地では珍しい送電線の鉄塔があり、山のように荷物を積んだトラックが往来し、勿ちシルクロードの幻想を打壊す。更に長い交通渋滞が追討ちをかける(渋滞の原因は悠長な道路工事であった)。しかし、10kmも走ると牛が放牧されている草原、防風林に囲まれた島が右手に現われ、左手は小石の原野、

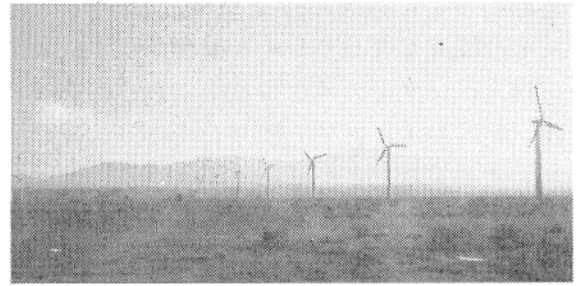


写真1 風車発電所、風車は7基2列で計14基
(福田隆之氏 撮影)背景はボゴダ山

ゴビ灘^{タン}が続きその先にはボゴダ山が見えてくる。突然風車発電所が左手に現われた。風車の大きさはよく判らないが直径10m位かと思う。ガイドの辛^{セン}さんは、ここは風の通り路になっていると説明したが出力には触れなかった。もし直径10mとすれば1基10KW以上の出力が予想され、14基もあれば小さな集落の電力は賄えるであろう。しかし、この時は無風で動いていなかった。やがて右手に青々とした大きな湖が見えてくる。ガイドは塩の湖、で大量の食塩を製造していると説明する。よく見ると湖の先に白いものが見える。非常に塩分が濃く、空気が乾燥しているので、浅い蒸発田に湖水を入れておくだけで容易に塩が取れるのである。確かに塩湖という町が湖岸にあり、かなり大きな工場



写真2 込坂城、街道筋のバザール、後方の建物はDaban City Peasant Trade Marketと英文表示も書かれているイスラム風常設市場

の前を通り過ぎた。ここで塩を包装して送り出すとの事であった。

出発後2時間経って、トルファンまでのほぼ中間の町、^{ターバンチン}込坂城に到着、昔の隊商宿の面影を

残す囲の中の招待所に車を止めて20分の小休止。その間近くのバザールを覗きに行く。天山の東端とボゴダ山の西に張り出した支脈との間の狭い峡谷の入口に差し掛った所でバスは停止した。ガイドは“ここからボゴダ山が一番良く見えます”と案内し、全員車外に出た。豊かな水の流れる広大な緑の原野の彼方に、氷雪を頂く峯々が堂々と視野一杯に横たわっている。最も高いボゴダ峰(5445m)は雲に包まれ、しばらく待ったが見ることは出来なかった。辛さんは“最近氷河が目に見えて小さくなって来た。氷河が消える時は、我々が生きて行けない時です”と語った。その時、太古の民族大移動は気候の変化によって惹き起されたに違いない、という考えが脳裏をよぎった。

車がトルファンに近づくと、日干しレンガを隙間を明けて積み上げた市松模様の建物が数多く見え出した。辛さんは葡萄の自然乾燥室で、内では主に老人が働くと説明した。トルファン盆地は暑く、乾き、風が強いと聞いていたが、この時気温は32℃、無風状態で、いささか拍子抜けであった。やがてバスは側道に入り、一軒の農家の前に停車した。カレーズ(地下水路)見学のためであった。そこはカレーズの末端に近い所らしく、背丈位の深さを豊かな水が流れていた。ボゴダ山の氷河から延々と地下を流れて来た水はどんな味であろうか?衛生の問題より好奇心が勝り、一口飲んでみた。それは冷く、微妙な甘みがあり、素晴らしい水であった。カレーズは20~30m間隔で掘られた深い縦穴の底を結ぶ水路であるから、途中で地上を流れる部分が無ければ汚染の恐れは無い筈で、実際その後健康に異状は生じなかった。

ウルムチからトルファンまで180km余りの区間は、平滑さには別として完全舗装され、快適なバス旅行で見ると見るものも多かった。辛さんは新疆地域の幹線道路はすべて舗装されていると誇らし気に言ったがタクラマカン砂漠の南を通る、所謂、南道も舗装されたのであろうか?

トルファンの半日

ホテルでの昼食の後、直ちに見物に出掛ける。翌日早朝100km東方の善都の軍用空港から敦



写真3 トルファンのバザール、乾ブドー屋

煌へ飛ぶので、この午後は“能率良く”見物せねばならない。

最初、全員の希望で近くのバザールに行く。衣類、雑貨、食料、土産物と何でも揃っている、体育館のような建物の中を人波に揉まれて一回りする。同行者の多くは飾りの付いた、20cm位のウイグル風ナイフを買ったが、手に取って調べて見ると細工は粗雑で刃に至ってはとても物は切れない代物であった。当地名産の緑色の干しブドウは1kg9元(~230円)であった。ただし、粒に細い花梗が付いているので、そのまま食べると美味ではあるが口中に滓が残る。

2番目の目的地は有名なベゼクリク千仏洞であった。ガイドブックによると、市の東方40kmにあると書いてあるが地図が無いので見当もつかなかった。バスが並木道を抜けると左手に低いが量感のある砂の山が見え、次に細い鬚が無数に走る赤褐色の岩山が現われた。これら一連の山が名高い火焰山で、トルファン北部か

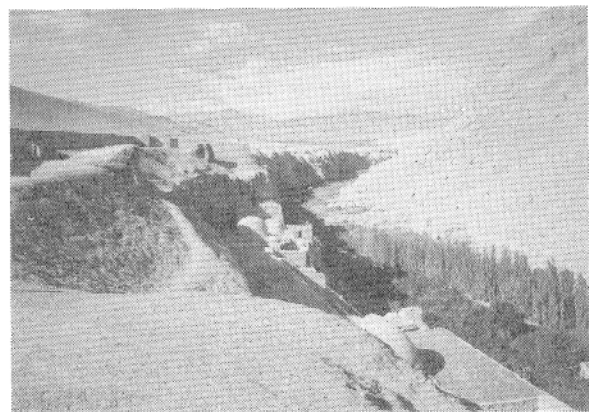


写真4 木頭溝とベゼクリク千仏洞、遠方の山は谷川の水源ボゴダ山

善都^{シャツワン}までボゴダ山の山裾を約100kmにわたって走っているのである。やがてバスは岩山の裂け目に入り、荒涼とした山道を登って行く。遙か前方に氷雪を頂くボゴダ山が見え、間もなく貧弱な鉄門の付いた煉瓦壁の前で止る。中へ入って下を見ると、狭いが豊かな緑の谷が、ボゴダ山に向って長く続いているではないか。谷底には小川があり、意外に水音が高く響き上がってくる。仏教に歸依した古人が、この谷の断崖に洞に穿がって、壁画を仏画で飾った心が伝わって来るようであった。

ここに現在する洞窟は83で壁画が見られるのは40窟である。しかし、最高傑作と言われた、誓願図は今世紀始め、ドイツ探検隊によって持去られ、第2次大戦で消滅してしまった。壁画の中には、目を潰されたり、顔だけ削り取られたものも多く、美術として見る対象とは言い難い。

見物後構内の土産品売場でお茶とハミ瓜の接待を受けた。現地で取れたてのハミ瓜を食べたのはこの時が初めてで、余りの美味に感嘆した。よく引締ったオレンジ色の果肉は程良い歯応えがあり、上品な甘さと香味を兼備え、メロンなどは比較にならないと感じた。聞くと、ハミ瓜はハミ市近郊産より、この近くの善都^{シャツワン}産のものが最高であるとの事であった。

次の目的地高昌故域には、再び谷（木頭溝^{ムトウコウ}）を下り、広いオアシスを数km南行して到達する。

火焰山は地図で見られるように、4本の溝で分断され、その各々には豊かな川が流れ、海拔0m以下に広がる豊かな農地を潤しているの



写真5 高昌故城、ロバ車で見物

ある。また、吐峪溝^{トユウ}にも千仏洞があることを後で知った。

高昌故域は周囲約5kmの正方形に近い形を有し、面積220万m²と言われている。この広大な区域に殆んどは原形を止めていない泥の塊状の遺構が散在して居り、徒歩見物は疲れるし、意味もない。そこでロバ車が登場する。一行は5台のロバ車に分乗して最も遺構が集中している区域を往復する。仏塔の基部と思われる建物

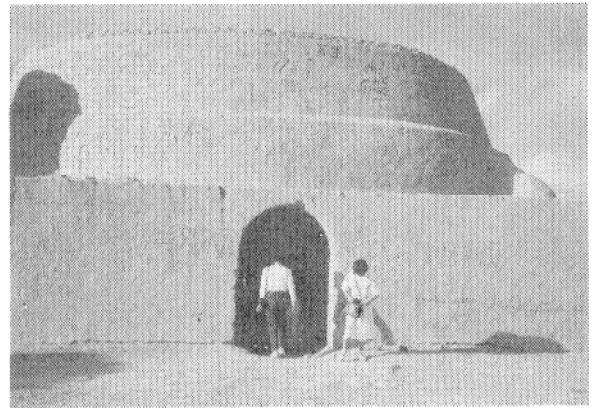


写真6 高昌故城
落書だらけの遺跡

の壁を見ると、漢字、アラビア文字で書かれた名前が埋め盡くされていた。しかし、ここまで来て名を刻み込んだ日本人は居なかったようである。一同、遺跡に充分堪能してゲートまで戻ると、又もや土産品店でハミ瓜の接待にあづかっ



写真7 夕陽を浴びた火焰山

た。ただし量が少かったので後から来た仲間には回らなかった。

歸途、火焰山の麓に近いアスターナの古墳に立寄り、壁画のある墓室を拝覧し終った時、日は既に傾き、火焰山の山巒が強いコントラスト

で浮び上って来た。バスの中から赤い夕陽を受ける時を待って撮った写真を示す。

夕食後、近くの野外劇場へ案内され、しばしウイグル民族の歌舞を見物した。女性のダンサーも、歌手も民族衣装を着ているだけといった感じで、楽手のオッサン達はYシャツ姿で、全くムードが無く、すぐ退屈してしまう。ただ珍らしかったのは、劇場はブドウ棚で被われ、沢山の大きな房が垂れ下がっていたことである。暗い夜道をロバの乗り合いタクシーに乗ってホテルに戻り、午前0時にトランクを廊下に出し、長い一日の日程を終えた。予定のスケジュールを順調に消化し、可能な限りの見物をした筈なのに、何か充たされぬ思いが残った。

敦 煌

善都を10時20分に離陸した辺境用の名機、アントノフ24型機は砂漠を一直線に500km飛行し11時30分に敦煌に着陸した。もし陸路をとれば、トルファンから846km、少なくとも1泊2日の旅を覚悟せねばならないので、空路は有難い。飛行機に乗って始めて、ツアーの定員22名の理由が判ったのである。アントノフの客席は最大50名で、添乗員とガイドを1名づつ、とすれば丁度2グループを運ぶことが出来るのである。我々の場合も別のグループと一緒に満席であった。

敦煌では最高のホテル、“敦煌賓館”に泊ると聞かされていたが、案内された先は“太陽能賓館”であった。全員クレームを付けたが、相手は旅行者の立場を無視することに馴れた中国国際旅行社のことである。結局アキラめて了解することにし、早速昼食となり、即座に23名分の料理が出された。現地では既に決定済の事実を黙っていたに相違ない。ただしホテルは別に悪くはなかった。

午後は、市内から至近距離にある砂山、鳴沙山に案内され、お決りコース“ラクダに乗って月牙泉往復”に嵌め込まれた。午下りの太陽が強烈に照り付ける下で、“つば広の帽子を持って来れば良かった”と感じたが、ラクダ乗りは結構楽しいものであった。月牙泉とは三ヶ月型の泉の意で、未だかつて水が枯れたことは無い

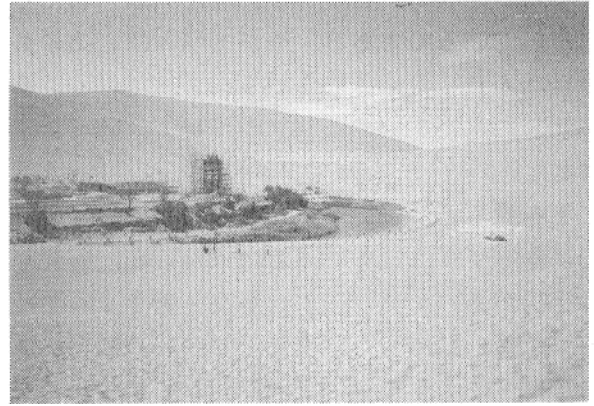


写真8 敦煌、鳴砂山中の月牙泉

と言われている。写真を見ると、泉の畔に何やら建てている様子であるが、之はホテルを建てていると聞いた。生活排水をどう処理する積りなのか大変気になる所である。その後市内に戻り、想像していた通り、貧弱な敦煌博物館を見学し、バザールを覗いて宿に戻り4日目の日程を終えた。夕食後の一刻、ホテル近くの街に散歩に出かけた。様々な食べ物の屋台が出て居り、鍋焼きうどんらしいものを試食して見たいと思った。しかし、飽食のため胃袋に余裕がなく残念ながら諦めた。

5日目の早朝、ラジオ体操の音楽らしい大音響で目が覚めた。外はまだ真暗である。後で調べるとホテルの裏に学校があり、北京時間に従って学校運営が行われているのであった。ここまで徹底的に時間を規制しているとは想像も出来なかったもので、いささかショックを受けた。

ツアーのハイライト莫高窟は敦煌市の南方に横たわる砂山、鳴沙山とその東の岩山、三危山との間を流れる大泉河に沿う鳴沙山の崖に掘ら



写真9 大泉河に架かる橋上から見た敦煌莫高窟(北端部)

れて居る（市内からの距離は約25km）。河は完全に乾上っていたが、その昔、豊かな水が寺の樓閣の影を映していたと伝えられている。私共が到着した時は朝日が昇って間もない時で、人も木々も長い影を落とし、かなり肌寒さを感じた。見物人はすべて入口のクロークにカメラ、ビデオおよびバック類を預けさせられ、持ち入れることが出来るのは懐中電灯のみである。懐中電灯を持っていない人は借りることが出来るが、大きい割に暗いので、明るいクリプトン球付きで反射鏡の大きな機種を持参することをお勧めしたい。

私共は9層の桜閣の前にある入口から入り、北に約400m余り歩いて、隠された大量の古文書が発見された17窟から見物を始め、桜閣のある96窟に鎮座する36mの大仏を拝し、合計11窟を見てホテルに戻り昼食をとった。午後は12窟を訪ね、最後に土産品店に立寄って歸った。後になって考えると、全員予備知識不足で、ただガイドの後を付いて回り、たどたどしい日本語の説明を長々と聞かされながら適当にライトを当てて見るだけに終わってしまった。一体どんな基準で見物する窟を決めたのであろうか？ガイドの話はジャータカ（仏陀の前世の物語り）を描いた絵の説明が多いと思ったが、有名な塑像や絵画のいくつかは観賞することが出来た。

莫高窟に現存する492窟の壁画の総面積は4.5万m²余り、彩色像は2千体以上と称せられているので、“僅かな日数で心残り無く観賞するには十分な予備知識を必要とする”というのが今回の貴重な経験であった。予め見るべき窟

のリストを作っておかねばならない。

さて、6日目の午前は映画“敦煌”の舞台として作られた大規模なセットで、今や観光名所の一つとなっている“敦煌古城”を見物し、昼食後1時に空港へ行った。黒板にチョークで書かれたスケジュールによるとウルムチ行の便は3時40分発であった。所が予定時間が過ぎても飛行機は到着しない。途中の寄港地、善都が砂嵐のためと説明された。外に出て西北の方を見ると空が黄色っぽく見え、成程と思う。結局3時間以上遅れてウルムチに着いた時は9時近く、既に薄暗くなっていた。これでウルムチの市内見物は流れてしまい、一同大いに残念がった。同室となった大学生は“来年は1人でウルムチに来る”と決意の程を披瀝したのであった。一体この辺境の都市の何が人を惹きつけるのであろうか？。

あとがき

始めて参加したツアーは大変楽で効率的であった。しかし、それらは反面、旅の思い出を希薄化する要因となるが、これは止むを得ない。

著者の場合、再訪を考えての実地調査をいう点で満足出来た。多くの心残りは再訪への夢をかき立てるのである。西域を旅行する最善の形は、同好者10名程度で自己企画の団体旅行を旅行社に請負わせる方式であると思う。期間は、余計な都市に泊まらずに最低2週間は必要である。今、暇を見ては計画を練るという。旅行の最大の楽しみを味わっている所である。